助産師の技能の熟達化に関する研究

―分娩期の診断能力に着目して―

M152329　森　田　智　子

１．研究背景と目的

助産師は，正常な分娩経過については，助産師の判断で管理することができる。このため，産科医師不足が進む現代，助産師への期待やニーズが高まっている。

その一方で，助産師の技能や自律性が低下している現状が見受けられる。助産師には基本的技能の獲得のみならず，獲得した技能を熟達させることが求められる。では，技能の熟達にはどのような要因が関係しているのであろうか。人は，様々な経験を通して熟達する（今井ら，2013）。しかし，同じ経験をしても皆が同じように熟達するわけではない。本研究では，分娩期における助産師の診断能力に着目し，分娩期における助産師の診断能力を熟達させる要因を明らかにする。

２．先行研究レビュー

２－１．熟達とは

熟達者とは，ある特定の領域での経験や専門的なトレーニングを積み，その領域の知識や技能に習熟している者を指す（Ericsson ら，1994）。波多野（1996）によると，熟達者は構造化された多くの知識を持ち，速く正確な処理をするという。

熟達者は，知識が高度に構造化されており，鍵となる情報を認識している。素早く的確に仮説を立て，それを熟考・修正しながら，適切な解を導くような診断能力を持っている（Patel ら，1986；古賀，2005）。

熟達するためには，ただ経験を積むのではなく，よく考えられた練習や能動的モニタリングを通して，経験から学習していくことが重要である（Ericsson ら，1993；Kolb，1984；波多野，1996）。

２－２．熟達を促す要因

本研究では，目標志向性，組織風土，余裕という要因に焦点をあてる。

個人の学習を促進する信念として，目標志向性がある。知識の理解や修得，また他者からの高い評価や承認の獲得，低い評価を避けようとする目標志向性である（Dweck，1986）。

個人の学習行動は組織風土によっても促される。倉重（2003）は，モチベーションの強化が図られていることや，継続的な学習が可能な環境が整っていること，多種多様な経験が保証されていることが，組織内での個人の能動的な学習を促すと述べている。

組織風土は，目標志向性を介して間接的に学習行動に影響する可能性がある。組織の風通しがよく，互いの意見が述べやすい風土は，個々の目標志向性を促進するといわれている（松尾，2006；樋口，1996）。

知識があることで，思考過程に余裕を生じ，正しい診断に結び付く。熟達者の知識は，高度に構造化されており，それによって下位技能が自動化し，作業記憶で行われる高次の意識的な情報処理のために多くのリソースを割くことができる。

３．仮説

本研究では，仮説１「目標志向性は，学習行動に正の影響を与えるだろう」，仮説２「組織風土は，学習行動に正の影響を与えるだろう」，仮説３「組織風土は，目標志向性に正の影響を与えるだろう」，仮説４「学習行動は，直接的に診断能力に正の影響を与えるだろう」，仮説５「学習行動は，知識と余裕を介し，診断能力に正の影響を与えるだろう」の５つの仮説を設定した。

４．方法

日常的に分娩業務にあたっている助産師30名（平均勤務年数8.93年）を対象に，課題ビデオの視聴による診断能力の測定と，質問紙調査を実施した。

５．結果と考察

分娩期の診断能力を高めるためには，助産師としての経験だけでなく，自己の診断や能力を振り返るような省察学習や，他者からの評価を受けるようなフィードバック学習が効果的であることが分かった。このような学習は，目標志向性の中でも熟達目標と遂行回避目標によって促されることが分かった。また，伝統保守的な組織風土や，問題が生じたときにスタッフで解決できるような風土，スタッフ一人一人が尊重され公平に扱われている風土によって，学習が促されていた。一方，他者の行動を観察・模倣するような他者学習では，診断能力向上は促されないことが明らかとなった。

診断能力の間違いを防ぐためには，助産実践の場である分娩経過の中で，自己の行動や失敗の結果から学ぶことや，様々な方法を実践してその結果から学ぶような実践学習が効果的であった。逆に，実践の場から離れた院外研修学習では，診断能力の間違いを促進してしまうことが明らかとなった。

最後に，緊急性が高まっていく場面では，助産師の経験値や省察学習が診断能力を高めていた。フィードバック学習や他者学習のように，自分主体でなく他者主体の学習方法では，緊急度が増す場面での診断能力は抑制されることが示された。